百合子賞　佳作　受賞作品

幸せの見つけ方

郡山ザベリオ学園中学校

恐　れ

最初は　他人事だった
中国で感染症が広まっているらしい
亡くなる方もいるらしい
日本にも上陸したらしい

徐々に　自分事になった
すぐ近くの病院で感染者が出た
マスクが売り切れた
学校が休みになった

変わりゆく日常に　戸惑った

もし自分が感染したら
親は重症化してしまうかもしれない
自分が原因で
人が死んでしまうかもしれない
そこはかとない　恐怖に陥った

不　満

行動が制限された
友達と会うことも
病と闘う祖父を励ましに行くことも
自分にとっては大切なことでも
不要不急と言われてしまった

終わりの見えない不慣れな生活に
不満がたまっていく

自粛を徹底している人
気にせずに遊んでいる人
様々な考えで行動している人がいる
感覚の差に　唖然とした

人それぞれの考えは尊重すべきだけど
命がかかわると
争いが生まれていく

変わらないもの

変化の中でも
変わらないものはある

生い茂る緑
綺麗に咲く花
青い空
人々の笑顔
人と人との繋がり

まるで
辛い状況にいる私たちを
元気づけるような
いつもの光景

気づき

家族との会話が増えた
普段は見るだけだった山に登って
自然の気持ちよさを知った
ずっと読みたいと思っていた
分厚い本を読んだ
ギターを始めてみた

家の中でできる事
ひとりでできる事
探してみると
ささやかな楽しみや
自分の新しい一面に気づいた

幸せ

変化のない人生なんてない
進学　就職　結婚

人はいつだって
変化する日常の中に
幸せを見つけてきた

すぐそばに落ちている幸せの種
それを見落とさずに
自分で自分の幸せを作る

思考を止めないで
幸せを作る力
それが今
大切なのかもしれない

（指導教諭／柳　沼　とも子）

《作品の意図》

新型コロナウイルスと共に過ごす生活の中で感じたことや気づいたことについて書きました。

突然訪れる変化への戸惑い、未知のウイルスへの恐怖、制限される生活への不満、何も変わらず勇気をくれる自然や人々新しく出会った楽しみ、幸せのみつけ方などをまとめています。

誰もが１つは共感できるように気をつけました。

《作品の寸評》

作者は、コロナ禍にある自身の内面の変化を静かに見つめて五篇の詩を書いた。一作目「恐れ」の冒頭に表現された「最初は他人事だった」という感覚が、きっと誰の心の奥にもあり、さらに二作目「不満」にある「自分にとって大切なことでも不要不急」という表現に読み手は思わずうなずくだろう。

三作目以降、作者の眼は身近な事象を通して、日常の中で忘れかけていた楽しみを一つずつ発見していく。作者の「気づき」とともに読み手も「見るだけだった山」や「分厚い本」に、自身の思いをめぐらすことができるのだ。作者の詩の世界へするりと誘われる瞬間である。

そして、小さな「気づき」を自分なりの言葉にして詩を紡いだことで、作者は「自分で自分の幸せを作る」ことを決意するに至った。その過程があざやかに浮かび上がる五篇の構成も素晴らしい。最終連で「思考を止めないで」と前を向き、現実の苦境を乗り越えていく強さが行間ににじみ出ているところに、この作品の魅力がある。詩にとって比喩は極めて重要な修辞であるが、作者の心にやわらかな光が差し始めることを予感させる平易な表現に好感が持てた。

（審査員／柳　沼　智　恵）